3 〈10月7日午後〉南京虐殺記念館見学、アートプロセスとシェアリング

記念館が提供する史実を学び、見学中の自分の変化を感じて気づくとともに、日中参加者の知識の違いを知り、2日目以降のワークショップで共有できるテーマを作ることを目的に、それぞれで記念館を見学した。見学後、記念館の敷地内にある広場にて、中日混合の小グループになり、画用紙とクレヨンを使って今の気持ち、思い浮かぶイメージなどを表現し、それをもとにしたシェアリングを行った。公共スペースでのワークであったため、家族連れで記念館を訪れた中国人たちも関心を持ち、一緒に加わるグループもあった。







グループでのシェアリング

4 〈10月8日〉HWH ワークショップ

午前:ウォームアップエクササイズ

円になって、

名前と動き 名前と動きを使って今の状態を表現する。

雷まわし 一人一人の表現した音と動きをウェーブのようにまわす。

想像のリレー 小鳥、てんとう虫、マッチ、金魚鉢の金魚、などをまわす。

音のボール 音の出るボールを円の中で投げ合う。

列になって、

ここからあそこへ 好きな方法で一人ずつ部屋の角から角を歩ききる。 **ここからあそこへ(ペア)** 即興で演技をしながら部屋の隅から隅まで歩く。

二重の円になって、

30 秒シアター ペアになって与えられた役を 30 秒間演じる。

ラインレペティション(台詞の練習)決められた台詞を、繰り返す。



30 秒シアター

円になって、

ソシオサークル(社会の輪)

輪になって、お互いが共通の点を持っている事を確認する。(写真下)

私の名前は~です。私は~人です。(アイデンティティーのワーク)

日中の参加者の前で自分の名前と国籍を名乗る。グループを前にして、「私の名前は~です。私は~です。」と声に出して言い、沸き上がって来る気持ちや感覚に気付く。



ソシオサークル

メッセージの地図 (アイデンティティの解体と構築)

私達のアイデンティティやお互いの日中に関するイメージは、家族、学校、 友人、地域コミュニティ、メディア、インターネット、政府、書籍などから、 常に様々なメッセージを受け取って形成されている。どこからどんなメッセー ジを採り入れてきたのか、それらにどんな影響を受けてきたのか、実際に地図 を描くことによって解き明かす。

午後:サイコドラマ

個人的なストーリーのシェアと、サイコドラマ

まず小グループに別れて、戦争のテーマに関して初めて意識するきっかけになったエピソードや、自分の日本人、中国人のアイデンティティを意識したエピソードなどをシェア。それをもとにサイコドラマを行なった。



グループでのシェア、ストーリーの共有



サイコドラマ

5 〈10月9日午前〉幸存者証言

幸存者の常志強氏(83歳)の証言を聴いた。

常志強おじいさんは、南京虐殺のとき 10 歳でした。目の前で、6 人の家族が日本軍に殺されるのを見て、その場面は、何十年経っても昨日起こったばかりのことのように思え、今も辛くて恨みの気持で一杯であるそうです。



常志強 氏

おじいさんの家族は、両親、姉、4人の弟、おばあさん2人の10人家族でした。その年の秋、空襲が始まりましたが、年老いた2人のおばあさんを連れて逃げることができないまま、とうとう、おばあさんたちが「老人のことは心配せず、子どもを連れて逃げなさい。そうしなければ私たちは安心できません」と両親に命じました。泣く泣く、おばあさんたちを置いて、南京の国際安全区難民収容所に避難することになりました。街は難民であふれ、途中、道路が封鎖され、その日の晩は、内橋近くの家に隠れて過ごしました。翌朝、爆音が聞こえ、空襲で城内のあちこちに火の手が上がり、おじいさんは気を失ってしまいました。気がつくと、大通りから「日本人が来た、人殺しだ」と叫び声が聞こえました。

そこへ銃を持った日本兵がやってきて、家族を守ろうと前に立つ男たちを次々と殺していきました。とうとう逃げ場のないところまで追い詰められ、一人の日本兵が母の肩に銃剣を差し込みました。怒った母は、片手で弟を抱いたまま、もう一方の手で銃剣を握りました。日本兵が銃剣を引いたので、母の手が切れたくさんの血が流れました。おじいさんと姉は、「お母さんを殺さない

で、殺さないで」と泣いて頼みましたが、日本兵は再び母を刺し、母は地面にポトンと倒れ、幼い弟は地面に投げ出されました。2歳だった弟は母を助けようと日本兵の靴を叩き、怒った日本兵にお尻から銃剣を刺されて、投げ飛ばされました。3人の弟たちも、「お母さんを殺さないで、殺さないで」と日本兵にかかっていきました。おじいさんは、弟たちに「逃げて!」と叫んだまま、意識を失ってしまいました。

気がつくと、母は背を壁にもたれたまま、口をきくこともできず、ただ涙をこぼしていました。母の眼が幼い弟を探していることに気づき、おじいさんは死体の山から血だらけの弟を探し出し、母のもとへ連れて行きました。母は弟に乳を与え、弟は一所懸命乳を飲み、飲むたびに傷口から血の泡が出るのでした。そうしているうちに、母の頭はだんだん垂れ、死んでしまいました。おじいさんは、もうどうしようもなくて、ひたすら泣いていましたが、思いついて父を捜し始めました。父は跪き、片手で頭を抱えた形のまま死んでいました。3人の弟たちも母の周りで死んでいました。おじいさんと姉がただ泣いていると、また大通りから「人殺し」という叫び声が聞こえたので、おじいさんは傷だらけで動けない姉をひっぱり、小さい部屋のベッドの下に隠れました。

翌朝、夫を殺された女の人が2人を彼女の家に連れて行ってくれましたが、そこへまた日本兵がやってきて、その女の人と傷だらけだった12歳の姉を引っ張っていきました。強姦され、倒れるように支えあい泣きながら戻ってきた2人を見て、おじいさんは本当に辛くて、「銃があったら日本兵を殺してやりたい」と思ったそうです。4人で難民区へ向かいました。どこもかしこも死骸だらけでした。ようやく難民区に着きましたが、金陵大学の南門は閉ざされ、難民たちがひしめきあっていました。中はいっぱいでもう入れないということでした。その時、日本兵がやってきて、一人の女性を強姦しようとしたので、難民たちが大きな声を上げ、ようやく門が開かれ、なだれ込むように中に入りました。おじいさんと姉は、安全区の女の人の世話を受けました。

安全区もすっかり安全だったわけでなく、たくさんの男たちが連れて行かれ

るのを見ました。皆、揚子江の川辺で銃殺されたそうです。葦の中に隠れ、逃げ帰った人から聞きました。後に家族を殺された場所へ行ってみましたが、もう死体はなく、弟の靴を見つけ、靴を持って泣き尽くしました。南京大虐殺はおじいさんの一家に大きな被害をもたらしましたが、南京にいた何十万の家族が、同じように家族の命を失いました。昔のことは思い出したくないのですが、どうしても出てきてしまい、今なお、毎日毎日、辛い思いや恨みでいっぱいになります。

最初、おじいさんは日本人と聞くと気持ちが悪くなっていたそうです。その後、証言活動を通じて、日本人にも、戦争反対で平和を主張するやさしい素晴らしい人たちがいることを知りました、ある日本人は、南京虐殺で殺されたのは30万もいないだろうという人に対して、「30万人いるかどうかは置いておいて、たった1人でも殺してはいけない、30人でも1人でも殺してはいけないでしょう」と言いました。これは良心的な日本人の心を代表していると思います。おじいさんは、2005年に長崎を訪れ、戦争の悪と平和の尊さをしみじみと感じました。日本も中国も、その後、戦争はなく、経済も発展し、豊かな暮らしをしています。戦争の悲惨さを知る人は、戦争の被害を受けた人々です。戦争を知らない人たちに戦争の悪を知ってもらわなければいけないと思い、それがおじいさんの生き甲斐です。80歳をすぎ心臓病にかかりましたが、おじいさんは健康でいられるよう努力しています。「恨みだけではだめで、大切なのは子孫を守ることですなんです。私たちの子孫がいつまでも被害を受けないように、平和を守らなければならない、それが私の願いなんです」と語りました。

6 〈10 月 9 日午後〉HWH のワークショップ

人体彫刻

軽いエクササイズの後、日中混合の4~5名の小グループに分かれ、今の気持ち、イメージ、常志強氏の証言を聴いて心に残った場面を、グループメンバーの体にポーズや台詞を付けて表現した。





人体彫刻



グループの終わり

7 〈10月 10日午前〉追悼式

揚子江河岸にある記念碑の燕子磯にて追悼式を行った。まず、日本人と中国 人のペアで上り献花、追悼し、その後、中国グループで、そして日本グループ でそれぞれ献花、追悼した。この一連の儀式は一般市民にも公開された。





追悼式





燕子磯記念碑

献花

8 〈10月 10日午後〉統合と振り返り、プログラム評価

粘土の彫刻美術館

粘土を使って4日間の体験を振り返り、沸き上がってきたイメージや、持っ

て帰りたいイメージを制作し、皆でシェアした。





粘土

皆で作品をシェア



プログラム評価

輪になって、全体のプログラム評価

プログラムに参加する前の自分と今の自分、どんな変化があったのか、ひと ことずつシェアした。

中国人男性:参加する前には、話す、言葉で表すことしか表現の方法を持っていませんでした。今回のワークを体験してから、自分の気持ちをいろんな形で

表すことが出来ました。アートやドラマの方法。私にとって、とても大切な発見でした。これから気持ちを表すときにいろんな形で表してみたいと思います。

中国人男性:まったく同感です。参加する前、私はたくさんの日本の方と接触したことがありませんでした。今回、グループでワークを体験したことは、形として新しく、私の考え方を変化させました。彫刻や工芸品、いろんな形の芸術品で、自分の気持ちや考えを表すことができることを知って、今回しみじみ素晴らしいなぁと感じました。だから、これからこういう形で交流を続けていくなら、本当の心と心の触れ合いと本当の歴史の体験ができるのではないか、そう思っています。

中国人女性:日本から来た友達と一緒に、日中戦争や南京大虐殺などについて 検討するのは初めてです。これまで私は、日中両国は和解できるか、できない かもしれないと思っていました。でも今回の活動を通じて、日中両国の間の和 解の希望が見えました。私は、両国の人々が、この交流を通じて相手の感情と 愛情の欲求に耳を傾け、両国の未来のために頑張っていたと思います。

日本人女性:私はどちらかと言えば、いろいろな感情を自分のなかでは感じている方だと前から思っていましたが、今までは、現実的な問題を解決していく時には、あまり感情を表に出さず、コントロールして抑え気味にした方がいいのだとずっと思ってきました。自分の中にある感情が多いことを良くないことだという風に思っていたのですが、今回参加して、感情というのは、何かを一緒にやろうとする時、出して伝えていった方がうまくいくのだということをすごく実感したので、日本に帰ってから、具体的に私の行動が変わっていくんじゃないかと思います。

中国人男性:この4日間の体験を通して、先生が教えてくださったドラマセラピーはすごく役に立つ、効いていると思いました。私たちに、自分の体で、自分の心で、戦争の苦しみと辛さを経験させてくれました。そういう方法で人と人の心の交流ができるんじゃないかと感じました。この4日間の活動を通じて、

いろいろなことを考えるようになりました。今までは日本人に好感は持っていませんでした。でも、何時間も日本の皆さんと交流しているうちに、日本の人々の中には、とても心の優しい良い方々がたくさんいるんじゃないかと感じました。もうひとつ、今回の体験によって、戦争が人々にもたらした苦しみは、被害者でなければ感じることができないのではないかとも感じました。戦争がもたらした苦しみは、教科書からは全然勉強できません。自分の体で体験しないと経験できない、そういうものでないかと思いました。

中国人女性:参加する前は、疑いの気持ちでいっぱいでした。政治や歴史の問題について、心理学がどれだけ役に立つのか、不信感を持っていました。でも4日間の体験を通じて、私の考えは変わりました。つまり、この新しい方法はどれくらい大きな役に立つのかではなく、とにかく役に立てばいいんじゃないかという感じがしました。私は今博士論文を準備しています。児童心理で、子どもを許すことによって、いかに子どもの性格を良い性格に変えるか、そういう論文を書きたいと思ったんですが、いろいろ困難に遭い困っていました。でも今回の活動を通じて、皆の行動を見て、中日両国には優しい人がいっぱいいるということを感じました。また、良い性格を育てるために、子どもの時からしなければいけないということを感じ、頑張っていこうという気持ちが固まりました。

中国人女性:ひとつは、それまで、中国人としてのアイデンティティを持てていませんでしたが、2日目のワークくらいから、中国人としてのアイデンティティが初めて持てたということを意識できて、すごく嬉しいし、私にとってはとても意義のあることでした。もうひとつは、2日目からだったんですが、心の中ではそんなに悲しくなかったのに、体が先に、涙がボロボロと出てきました。自分の体がコントロールできない状態であることに気付きました。体の方が先に、環境とか雰囲気を察していることにびっくりしました。先ほど粘土で自分の心情や考え方を表している時、知らない間に体の中で抑圧されているというか、そこに存在している何かの力、パワーが粘土を通じて発散できた感じがしました。良かったと思います。

日本人女性:私はここに来るまで、自分は知らないから、無知やからというところで、知ることから逃げていたのかなぁと思いました。これからは、知らないということが言えなくなったという現実と、もっと知らなくてはと思う自分のモチベーションの変化を大切にして、知っていく努力と人に伝えていく努力の両方をしていこうと思います。

日本人女性:私の一番の変化は、私はだいたいがあがり症で、緊張するとだめで、人見知りもあるし、学校の先生とか保育園の先生とかをしていたのに、子どもにはいけても、大人のなかでこういう風に発表するのとかは、ものすごく緊張する方だったんですが、それが変わりました。今回、こんな本格的なワークショップっていうのは初めてだし、しかも私が生まれた中国で、中国の方たちと一緒にお話できるってことが実現したっていうことは、90の母にもいろいろ聞かせてあげたいなぁと思います。変化は、しゃべれるようになったっていうか、たとえば自己紹介でしたっけ、言う時に一番に言ってしまったんです。すーっと言っちゃったんです。自分でもわからない力で、すーって。どうして一番目にいけたんだろう、それぐらい、気持ちが、体が開放してきてるなぁって思いました。利益で交流する日本人ではなくて、本当の意味での交流をしてほしいと言われたことを思い出しました。こういう交流を積み重ねていったら戦争は起こらないと思いました。

中国人女性:参加する前から、深く深く戦争の苦しみと辛さを感じていました。 どこから感じたかというと、両親から、両親の両親から感じてきました。それ は私まで伝わってきたんです。戦争がもたらしたトラウマが心のなかにたまっ ていました。でもどうしようもなく、どうやってこの気持ちを変えようか、今 まで方法がなかったんです。でも、今回のワークショップを通じて、自分の気 持ちを変える方法をなんとか見い出した気がしました。そして、そういう方法 は、今までの理論的、理性的、言葉を使う方法ではありませんでした。理論的 な、理性的な言葉は、戦争がもたらしたトラウマを癒すにはとても無力なもの のように私は思っています。だから今回のような、自分の体で、自分の手で、 いろんな儀式で、ドラマで、芸術で、いろんな形で少しずつトラウマを癒すことができるように思います。そういう形でなら、心の奥にたまったトラウマを癒すことができるのではないか、深い交流もできるのではないかと感じました。私は、もともととても恥ずかしがり屋です。でも、このグループの中では、恥ずかしがり屋の私でも、皆さんからのあたたかさと関心、思いやりをもらって、いろんなことができました。本当に皆さんに感謝しています。

中国人女性:4日間のワークショップを通じて、自分自身が人間として成長してきたと感じました。これまで、この世界のために、何か貢献しなければ生きる意味がないと思っていました。だから生きるために、生きる意義をもつために、一所懸命いろいろやってきました。ですが、とても疲れてきていました。アルマンド先生の方法は、人間としてのアイデンティティを私に教えてくれました。必ずしもこの世界に対して何かやらなければいけないということではなく、とにかくグループの一員としてどうすればいいか、この世界のために何かをやればいいのです。権利をもって何かやればいいんです。そういうことを今回私は学びました。だから、私は今、人間としてのアイデンティティの意識が強くなりました。一員としていれば、何かをすれば、この世界は受け入れてくれるのではないかと思います。もうひとつは、私は、最初、心理学はいかなる政治や歴史のことがらに対して何か役に立てるのだろうかと不信に思ってきたのですが、4日間の儀式、芝居、芸術、いろいろな形を通じて、気持ちを解消、解放するためには、いろんな形が可能であり、そういう形で心にたまったトラウマも解消できるということを感じました。

日本人男性:ここに来る前に感じていたのは不安の気持ち、どうなるのだろう、全然知らない中国の土地で、中国の方がどんなふうになっていくのだろうという、すごく不安な気持ちでした。そして今思っている感じは、それとは真逆の、すごく安らかな気持ちです。それは、皆さんとの出会いがあったからだと思います。でも、単なる出会いがあったというだけでなく、両国にとってとても意味深いこの場所で出会えた、場所ということと、過去からの歴史のなかで学びながら、今ここで出会えているという、時間的な流れのなかでも出会えたとい

うような流れもあると思います。そして、それらをつなぎ合わせてくれるドラマセラピーのワークがあったから、この安らかな気持ちになれたのだと思っています。

韓国人女性:この4日間、皆さんたちと同様、まさに平和だということを強く感じたし、今日の最後の作品も、ほとんどのキーワードが平和を望む内容が多く含められているのを見ながら、平和を作るためには何が必要なのかをより強く感じています。様々な出会いと交流、そして自分の目から耳から心から受け入れながら知ること、そこから伝えること、それともっと活動ができることが人には必要だということも、またこの場所から思いました。ひとつの課題、特に日本側の課題がとても重要な部分で、中国での出会いから知らなかった歴史や事実を学ぶチャンスは非常に重要な部分だけど、でも、他にも、日本から被害を受けた韓国、東南アジア、アメリカも、そういう人たちがまだそのままになっているということ、日本社会の在日の方たちの辛さ、痛みが、今も解けずにそのままになっている部分を、このきっかけを通じてより強く感じ、そういう戦争から受けた様々な辛さや痛みをもっている人々と手を結びながら、一緒に行うために何が必要なのか、もっともっと考えながら活動してほしいと強く感じました。

日本人女性:私は、今回南京に来るまで不安とか緊張とかがありましたが、以前、上海で大学に通っていた時も、先生は私たちに遠慮して、そういう話をしなかったので、本当のところ、中国人はどう思っているのか、あまり知ることができなかったのですが、この4日間を通して、恨んでいる人たちの話も聞けたりして、嬉しかったと思います。

中国人女性:実は、この前までずっと心のなかに暗い感じがありました。授業で、先生に中日の平和を保つために頑張らなければなりませんということを教えて頂きました。しかし、自分は独りで頑張る感じがしていました。ここに参加してから、多くの日本の友人は、こういうことを理解しているとわかり、私はもう独りではなく、一緒に頑張って平和を求めることができるんだと希望が

持てました。

中国人男性:参加する前、ドラマセラピーに不信感と好奇心、疑いを持ってきたのですが、いろいろなことをやってみて私は変わりました。今まで私は、いろいろなことがあった時、いつも自分を観察者にして物事を観察してきましたが、しかし今回の体験をしてから、自分の役が変わりました。これからは、観察者の役ではなく、体験者としていろんなことに対応するようになると思います。今回皆で一緒に交流をして、深く理解し合うことで、国境を越えた、言葉を超えた、心と心の触れ合いの交流になりました。今回、アルマンド先生のセラピーで私が最初に感じたのは、日本の皆さんが心のなかにたまった、今まで抱えてきた負担をおろして、平然と私たち中国人に直面できるようになったということです。だから、心理学、セラピーを信じて、これからもっともっと日本の方がそういう方法で心の負担をおろせるように願っていますし、私も一緒に頑張っていきたいと思います。

中国人女性:自分の個人的な変化ですけれども、気持ちの変化をグラフで表すと、最初、気持ちが上がっていて、山から落ちる前は、不安やいろいろな気持ちが多かった。今は一番下の、穏やかな感じ、落ち着いている感じです。わーっと感情が爆発していたのが、皆さんとシェアリングしたりすることで収まってきて、今が一番私の好きな状態です。もし、皆さんが昨日やってくれた劇や粘土や彫刻とかがなかったら、皆さんと出会えなかったら、今、ここで、こういう状態にはなれないかもしれないと思うので、皆さんにすごく感謝しています。

日本人女性:南京に来る前、正直怖かった。オーストラリアに留学している時に、15歳の中国人の男の子に出会って、日本人は嫌いだし帰れと罵られたことがあって、それがたぶんトラウマになっている部分があって、南京に来るのがとても怖くて、また罵られたりするんじゃないかと思ったりしながら来たんですけど、中国人の方が、日本が凄い悲惨なことをしてきたなかで、それにも関わらず、心を開けて入らせてくださったことに感謝していますし、町に出た時も、町の人たちが温かくて、顔もほんとに日本人と全然変わらなくて、温かい気

持ちでいっぱいになりました。私の母はアメリカに対して大きな憎しみをもっているのですが、母にこのセミナーのことを伝えたいと思いました。このセッション、自分の気持ちに深く残るものがあったので、これも広げたいし、ここで終わらずにつなげていければいいなと思いました。

日本人女性:一番大きな変化は、心から謝罪ができたということが自分ですごく嬉しいです。2年前に来た時には、その時もたくさん南京事件のことを勉強して、事実として、頭ではわかっていたんです。今日行った記念碑のところにも2年前、行ったんですけど、頭でこんなひどいことは二度と起こしてはいけないという知的理解だったのが、今回は、皆さんとワークを通して、一緒に感情をシェアリングすることで、心と体を通して体験することで、すとんと心に落ちた感じがしました。自分が謝罪する加害の人間であるということが、心から謝罪したことで、今、すごく穏やかな気持ちでいられるような。こういう風にいられたのも、皆さんが温かくずっと見守ってくださったおかげだと思います。感謝しています。ありがとうございました。

日本人男性:僕がこの場にさっと入ってきた理由として、人と人との触れ合いに、絶対不利益はないという考え、思いがあって、それは4日間でも変わらなかった。変わったこととしては、自己のアイデンティティというのは意識せずに出てくるものだと思っていたのですが、感情と感情の触れ合いのなかで、自己のアイデンティティっていうのを再認識した感じです。

日本人女性:ここに来て歴史の事実、過去、加害と向き合うという思いで来ました。この4日間を通じて今感じていることは、初めて日本人であるということのアイデンティティをもつことができたように感じています。日本人としてこれから責任をもった生き方をしていきたいと今強く感じています。というのも、4日間を通じて、中国の方々が様々なドラマやアートで、傷つきやトラウマや怒りや悲しみ、苦しみをたくさん表現してくださって、それがしみじみと心と体に伝わってきました。日本人として、二度とそういうことがあってはならないという気持ちで、自分に責任をもった生き方をしたいと思いました。それ

から、傷つきにも関わらず、すごく人として優しく私たちに関わってくださって、優しさと温かさで迎え入れてくださって、そのことにもしみじみと感じ、頂いた優しさを、優しさと平和の輪を広げていきたいなという風に今感じています。本当に感謝しています。ありがとうございました。

日本人男性:僕は最初カメラマンという立場で参加させて頂くことになって、皆さんのパワーに引き込まれ、指先であるとか、一つひとつから感情があふれてきていて、それを逃さないようにカメラを回していました。まだうまく出せないんですけど、あふれるような、持って帰るには十分な、ケースに入りきらない感情をありがとうございました。

中国人女性:最初、アルマンド先生を魔法使いのように見ていました。日本人と中国人の間には、もともと壁があり、日本人と他の国の間にも壁があります。皆いろんな方法を使ってこの壁を取り外そうとしてきたんですが、この壁はなかなか強くて取り外すことができなかったんですよね。この魔法使いが、今回この壁をどうやって取り外すのか私は期待していましたし、疑ってもいました。でも4日間のドラマとかアートを通して、なんとかこの壁が取り外されたような気がして、私はここにいらっしゃる日本の皆さんとこれから本当の心の友達になれそうな気がしています。もうひとつは、この先生はアメリカ人で、今回韓国人も中国人も日本人もアメリカ人もいて、先生は国境を越えて人間皆愛し合えるよう一所懸命に行っているように見えます。地球人が皆人間としてお互いを愛して、平和に生活してくださいという願いが強く、一所懸命そういう研究をしていらっしゃるのだということをしみじみ感じました。

張先生:私は今まで、いろんな中日の活動に関わってきました。和解のための活動にも参加してきました。例えば、そのなかには、歴史専門家のシンポジウムもありましたし、市民運動の活動もありました。ただ、心理的にトラウマを癒す、特にドラマの方法で癒すような、戦争がもたらしたトラウマを治すものは今回が初めてです。初めから終わりまでずっと参加することはできなかったのですが、さっき先生とちょっと交流して、何時間も交流してきた活動をひと

通り知ることができました。ワークショップは、皆さんが力を合わせて一所懸命やりました。それで、皆さんもいろんな感想があったように見えます。初日の午前、一人ひとりの名前と目的を聞きました。今、皆さんの感想から、それぞれたくさんの収穫を得たのだと思いました。そして私も、皆さんの発言から皆さんの感じたこと、また収穫を皆さんから分かち合うことができました。皆さんの発言は、何時間も体験して、また考えてきた一番大切なものではないかと感じました。私も皆さんと楽しみを分かち合うことができて、皆さんに感謝したいと思います。

もうひとつ、私の考えでは、今まで中国人でも日本人でも、歴史が原因で、まだまだお互いの心に暗闇が残っています。しかし、いろんな形で頑張ってきた目的はひとつです。たくさんの戦争被害者、幸存者、たくさん戦争に参加した兵士の人々、そういう人も、まだまだトラウマが残っていると思います。いかにそういう人の心のなかのトラウマを癒していくのか、今までたくさん方法を使ってきましたが、効果はわずかでした。今回見ていて、この心理療法は、人々の心のなかに残っているトラウマを癒すことができたように私は思います。だからとても成功したと思っています。そういう方法でもっともっと多くの人々、トラウマのある人々を癒すことをこれからやらなければならない、やるべき事業ではないかと思います。

最後のドラマワーク

30 秒シアター(ペアワーク)

昔話シアター

ペアで、最初の一人が「むかしむかしあるところに…」とお話をつくる。

アレゴリー

「昔々あるところに、一人の中国人と、一人の日本人がいて、二人で歴史の傷を癒すための旅をはじめました。」の続きをつくる。